

Peroral pancreatoscopy using the SpyGlass system for the assessment of intraductal papillary mucinous neoplasm of the pancreas

永吉, 洋介

<https://hdl.handle.net/2324/1441098>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）



論文審査の結果の要旨

親子式内視鏡システムを使用した経口膵管鏡 (peroralpancreatography;POPS) は膵管内乳頭粘液性腫瘍 (intraductal papillary mucinous neoplasm;IPMN) の主膵管病変の評価に有用と報告されてきたが、様々な問題点があり広く普及するまでに至っていない。申請者は、新しいSpyGlass胆道膵管直視化システムを用いたIPMN診断の有用性を検証した。当院で主膵管の拡張を伴ったIPMNと診断された17症例についてSpyGlassシステムによるPOPSを施行し、画像の質、悪性病変に対する細胞診および生検による病理組織学的検査の感度を評価した。12例にSpyScopeを、5例には内視鏡的逆行性胆道膵管造影(endoscopic retrograde cholangiopancreatography:ERCP) カテーテルを用いてのPOPSを施行した。

SpyScope使用例では92%で十分な可視化が得られたのに対し、ERCPカテーテル使用例では40%のみで病変の観察が可能であった。直視下生検は7例で可能であり、組織は腺癌が1例、良性上皮性腫瘍が5例、再生上皮が1例で、悪性腫瘍を診断する感度は25%、特異度は100%であった。SpyScopeを用いたPOPS下の洗浄細胞診は、悪性腫瘍の診断において感度が100%、特異度も100%であった。3例では、SpyGlassシステムを用いたPOPSが手術時の膵臓切離線を決定するのに有用であった。検査に関連する重篤な偶発症は一例も認めなかった。以上より、SpyGlassシステムを用いたPOPSは主膵管拡張を伴うIPMNの診断に有用かつ適切な検査であると考えた。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、結果などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについても適切な解答を得た。

よって、調査委員合議の結果、試験は合格とした。